

水産研だより

【今回の内容】

- 1 早期遡上アユの親魚養成事業の紹介
- 2 発眼卵放流や親魚放流の適正放流量について
- 3 外国人研修生を受け入れました



外国人向け研修(講義)

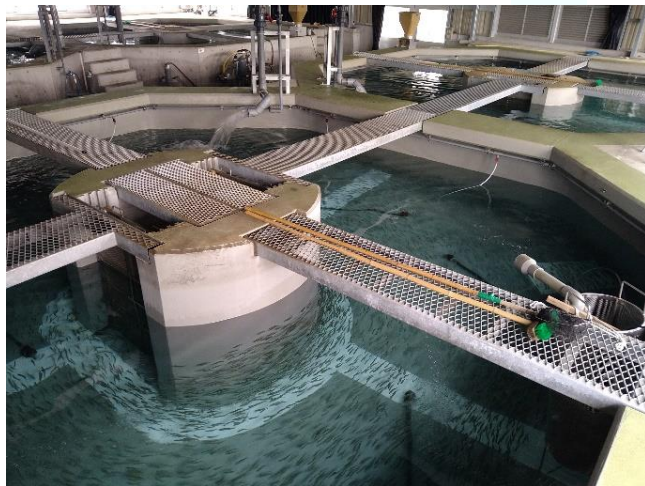
1 早期遡上アユの親魚養成事業の紹介

水産研究所と(一財)岐阜県魚苗センターでは早期遡上アユの親魚養成とその親魚からの種苗生産を試みています。

早期遡上アユとは、4月までの早い時期に川を遡上してくる天然アユのことを指します。これら早期遡上アユは魚体サイズが大きいうえ、遡上してから解禁までの期間が長い大型に成長しやすく、友釣りシーズン初期に漁獲されやすいことが分かっています。しかし、早期遡上アユは漁獲されやすい特性上、高い漁獲圧による減耗で産卵期まで生残しにくい可能性が指摘されています。そんな早期遡上アユ資源を持続可能な水準で維持するため、新たな増殖手法が求められてきました。

この親魚養成事業では、早期遡上アユを長良川河口堰で捕獲し、魚苗センター親魚養成棟にて養成・採卵を行い、次世代を放流種苗として安定供給することを目指しています。漁獲圧にさらされる前に捕獲・養成し、次世代を放流することで、早期遡上アユ資源の増加が期待できます。

しかし、養成期間中の減耗や成長停滞のほか、雌親の排卵時期を同調させる手法が確立できていないなど、多くの課題が残されています。特に雌の排卵時期の同調に関しては、放流種苗のもととなる卵の量を大きく左右する喫緊の課題です。現在は日長処理や水温処理のほか、ホルモン等の成熟関連物質にも焦点を当てた多角的なアプローチによって課題解決へと取り組んでいます。



魚苗センター 親魚養成棟



友釣り調査で釣獲された
早期遡上アユ由来の放流アユ

また、水産研究所では、早期遡上アユ由来の放流アユが本当に漁獲されやすいのかを明らかにするための試験も行っています。これまでの試験では、早期遡上アユ由来の放流アユは友釣りでの釣果がよいことがわかってきました。まだ試験段階ではありますが、試験を継続し早期遡上アユ由来の放流種苗の特性評価を行う予定です。

(試験研究部 山藤)

2 発眼卵放流や親魚放流の適正放流量について

近年、溪流魚(ヤマメ・アマゴおよびイワナ)の増殖方法が多様化しており、発眼卵放流や親魚放流も積極的に行われるようになってきました。

しかし、これらの増殖方法は技術は確立されていますが、放流する河川の規模に応じた放流量(適正放流量)の基準がないという問題があり、さらなる普及促進への足かせの一つとなっています。

下呂支所では、野外調査にて発眼卵放流や親魚放流から生まれた溪流魚を採捕して、成長速度、生残率を調べています。また発眼卵放流や親魚放流に関する過去の文献も調査し、その両方から得られたデータを基に単位面積あたりの適正放流量を算定していきます。

算定した適正放流量を基に、解説書を作成します。さらに、誰もが一目で分かるような早見表にもして、公開する予定です。



親魚放流由来のアマゴ

(下呂支所 長瀬)

3 外国人研修生を受け入れました

2024年6月から7月にかけて実施された、JICA小規模内水面養殖研修のうち、6月10日から14日の5日間に当研究所において研修を実施しました。

今回は、アンゴラ、カメルーン、コートジボワール、ガーナ、ジャマイカ、モザンビーク、ナイジェリア、パプアニューギニア、ソロモン諸島、ウズベキスタンの10カ国から各1名の政府水産関係職員を研修生として受け入れました。このうちアンゴラ、ソロモン諸島、ウズベキスタンの3カ国は岐阜県内水面漁業研修センター開所以来、初めての受け入れでした。

これで当研修センターで受け入れた研修生は、計42カ国から延べ210人となりました。

研修では、岐阜県水産研究所の業務と岐阜県水産業の概要、世界農業遺産「清流長良川の鮎」に関する講義、魚病診断におけるDNA抽出とPCR検査、水質検査キットを用いた水質管理の実習、ナマズの養殖技術等に関する講義およびナマズ精子の培養の実習、さらに県内養殖場の視察等を行いました。また、当所担当分の最終日には総合討議を行い、各講義・視察に関する質疑が行われたほか、母国の内水面漁業の課題に対し、本研修で学んだことをどのように活かすかなどの議論が行われました。



(漁業研修部 辻)